

地域と協同の 研究センターNEWS

2018年7月25日発行
167号

【巻頭言】

「都市農業のこれからと課題」

野田輝己（地域と協同の研究センター理事）

2015年4月16日に、「都市農業振興基本法」が制定されました。初めに参議院にて全会派一致で採択され、衆議院でも全党会派一致して成立しました。都市農業の「農地の多面的機能の重要性」について、特にバブルがはじけてから、指摘する論調が大きくなりました。また各地の都市計画も農地への負担が6割を超える事態となり、人口減少時代を踏まえ、国土交通省がこれまでの政策を180度変更したという論調に納得しました。

翌日の17日（金）、「JAの日本農業新聞」は全面グリーンカラーのJA広報版『都市農業の振興 緑の安らぎと農の豊かさあるまちへ』が出されました。これを手にした時の感動は今も忘れません。これまでの都市計画法や、大都市法にも、また高額な税を課していた税法にも改定を迫る論調がその後の記事に掲載されています。

高度成長期には都市農地は宅地予備軍とし国土交通省（旧建設省）管轄のもと、急速に都市計画で区画整理や再開発が進みました。ところが平成に入るとバブルがはじけて国や自治体が多額の開発投資をしてもちっとも地価は上昇には転じませんでした。それどころか今は40年前の各地で誕生したニュータウンの空き家率が高くなり、小学校も2校3校と閉鎖するほどの問題になって、これが人口減少時代かと実感しました。

昨今の気候変動で、ここ名古屋に大きな災害を起こした2000年の「東海豪雨」が記憶に新しいところです。庄内川流域で時間雨量が100^{mm}を超える大豪雨でした。当時NHKの解説委員だった伊藤和明氏は「日本の都市計画は時間雨量50^{mm}で設計している。これからは地球温暖化の影響で温帯に属する日本列島も夏の平均気温が2度3度上がる熱帯に近くなり列島のどの地点でも100^{mm}を超える頻度が高くなる。防災の観点から従来からの河川の治水対策だけでなく、都市が膨らみ山合の急斜面や谷筋、歴史的な低地の遊水地帯に建築規制を含む安全な都市計画を真剣に考える時だ。」と20年近く前に警鐘を連打されました。

国はやっと都市農地について東日本大震災を機に災害時の防災空間としての機能に注目しました。建物の密集する都市では平時は新鮮で安心な農産物栽培供給や身近な食農学習の場にしてもらって、緊急時には貴重なオープンスペースとして火災の延焼を防ぎ、避難場所にも利用できる必要から、自治体と防災時使用契約農地として今後急速に取り組むこととしています。【2頁につづく】

CONTENTS

地域と協同の研究センター 7月の活動

【巻頭言】「都市農業のこれからと課題」
野田輝己
【岐阜地域懇談会活動報告】郡上市正ヶ洞棚田見学会に参加して（6月19日）
全国おたがいさま交流集会 in 飛騨高山 開催／アジアカフェ 開催
情報クリップ
企画案内「戦争と平和「明治150年」を考えるつどい」

- | | |
|---|--|
| 1 | 3日(火)三重地域懇談会世話人会
4日(水)三河地域懇談会世話人会
5日(木)寄付講義⑫
6日(金)国際協同組合デー記念行事in愛知
7日(土)第1回共同購入事業マスターコース |
| 3 | 12日(木)寄付講義⑬
13日(金)第2回理事会
18日(水)NEWS編集委員会
19日(木)寄付講義⑭
20日(金)第2回協同の未来塾
21日(土)岐阜地域懇談会「プチフォーラム」第72回生協の(未来の)あり方研究会 |
| 3 | |
| 5 | 24日(火)研究フォーラム地域福祉世話人会
25日(水)第2回常任理事会
26日(木)寄付講義⑮
27日(金)「食と農」フォーラム
28日(土)第2回共同購入事業マスターコース |
| 8 | |

【巻頭言】「都市農業のこれからと課題」（1頁より）

そうした基本法の制定で都市農業は振興すべき重要なものと法的に位置づけられました。

妻が農地への「宅地並み課税反対」を掲げて農業委員に当選してから都市計画の中にも農業が継続できるようにと、東京圏、大阪圏の全国農業会議（農業委員会の全国組織）などのシンポジウムに手弁当で参加し、名古屋圏ではただ一人発言もし、大阪圏での大会後には寝屋川市の農業委員会全員が「野田農場」の見学と意見交流に來たほどでした。

東京圏、大阪圏のこの手の関係者は知事も自治体の市長・町長も議員も農地の議員（農業委員）を含めると、名古屋圏の10倍ごときではありません。残念なことに戦後名古屋市も愛知県下の農業委員会も豊橋を除いて、国や首長への農業委員会法に定められている「建議（意見）」を出さない自治体ばかりでした。選出される農業委員に能力がなかったのか、地方や国の政策施策にはイエスマンでいることが仕事だったのか不思議でなりません。これが（法律も新聞も読まない）保守的な風土？なのだろうかと思っています。

農業改革の名のもとに農業委員会法を変えて今期から建議という文字をなくし、選挙選出制度を廃止し、首長による任命制にしました。

日本の農業は、グローバル時代ともてはやす新自由主義の政権の中、食料自給率50%の目標も放置（放棄？）されたままです。これからは国は具体的な農業生産計画も出しません。すでに木材の自由化で国内の森林は荒れ放題になり災害多発の要因にもなっています。輸入農産物の関税は国内農業の振興発展に使われます。外国からの輸入農産物の関税を徐々にゼロに引き下げるTPPやFTAやEPAでは林業と同じく、国内農業も衰退疲弊につながります。各種の自由化協定による農業農村の経済的損失額をひたすら過小評価し、農村農家の更なる消滅を出します。人口減少時代に突入して、ほっておいても50年後人口8,000万人台になれば自給率の帳尻が合うのか？国自ら示し自治体に選定させた農業の担い手（認定農家）が、それでも一生懸命規模拡大しても、次の世代はいない。どんどん生産価格を下げ、4人家族で労働者1人分の純所得（売上＝純所得ではない）です。これで100年、200年と持続可能な農業が育つのか疑問に思っています。国連でも「国際協同組合年」をもうけ、

「家族農業年」として重要視しています。

2016年、2017年と2年間名古屋市守山区の農業者の団体に、「地域と協同の研究センター」事務局の野田幸男氏と役員になり、私が幹事長になりました。16年度末の総会講演には研究センター会員の江本行宏さんに「愛知県の都市農業振興計画の概要」を、17年度は研究センター常任理事の向井清史先生より「名古屋市の都市農業振興計画の概要」を講演して頂きました。市内最大の農業区を抱える港区や中川区より先に勉強をさせて頂き、久方ぶりに中身の濃い展望のある有意義な話をお聴きすることができました。先生には時間のなか、意見交換とかする時間を取れなかったことが残念でしたが、こちらの会員には農協理事や農業委員も会員にいます。何年か前に出された「名古屋市アグリプラン」の総括点など、どのように審議会では話し合われたのかお尋ねできませんでした。

区内では低地洪水時浸水地帯（江戸時代からお城を洪水から守る遊水地帯）にも住宅開発をします。その従前農家はそこに立派な「集合農地区」を作り多くを「生産緑地」にしました。それを今は住都局の建築許可が下り2011年9月の豪雨で浸水しました。一級河川が満杯（ハイウォーター）になると排水ポンプはストップさせられ内濫状態になります。これから住む人にも安心安全な住環境を提供することが公共事業なら一層重要な問題として、経済的なリスクの一番低い都市農業振興地として特化した行政への提案をしてほしいとは出過ぎた考えでしょうか。（市内では港区などのゼロ地帯など）

ともかく名古屋市だけが先行していた「駅そば半径800メートルの生産緑地禁止条項」は全国農業会議から指摘され廃止に、生産緑地指定要件の「500平米」が「300平米」に、再申請も可能になったことは画期的な事でした。

2018年3月末日、名古屋市の都市農業振興基本計画が向井先生を委員長のもと「なごやアグリプラン」が議会手続きなどを経て発表され、4月から都市農業振興基本法の運用が始まりました。

以上
（のだ てるみ）

【岐阜地域懇談会活動報告】

郡上市正ヶ洞棚田見学会に参加して（6 月 19 日）

熊崎辰広（岐阜地域懇談会世話人）

1. 岐阜大学教授中井健一氏（第 4 期奨励研究「山村における棚田の保存を地域の共同の力でいかに進めるか」）の提案をうけて、岐阜地域懇談会世話人会では棚田見学を企画しました。

「棚田の保存」という課題と、その課題を「共同の力で実現する」テーマを考えるために、中井氏がその発足に関わっている、「正ヶ洞棚田を守る会（のちに前谷棚田を守る会）」の活動などについても調査できればということで、現地在住の原氏（同懇談会世話人）の企画をもとにすすめました。

午前 10 時に、現地の入口に集合、そこから 10 分ほど進んだ正ヶ洞の棚田を 3 か所ほど中井氏の案内で見学しました。ひとつは車で上部まですすみ、そこから下りながら棚田の見学ですが、多くはすでに耕作されておらず、石垣などが猪に荒らされるなどし、わずかに中井氏の田が孤立して苗が植えられていました。そこからいくらか下ったところに、耕作維持されている何枚かの棚田がありました。樹齢 50 年ほどの杉が植林されている田も目立ちました。この棚田から道をはさんで、少し林道を進むと村間が池があり、その先の棚田（隠れ田？）なども見学。

2. 昼から、前谷地区自治会長で、「棚田を守る会」の副会長三浦さん、会長小島さんのお話を聞きました。

この前谷地区では、戸数 78 戸で、高齢化率 40%近くで人口は減少している。

農地面積は 25 町歩ほどで、急傾斜の山間地ということで中山間地交付金が 500 万円ほどあり、半分が農家へ、残り半分は水路管理や鳥獣害対策に使っている。県の無形文化財としての「拝殿踊り」には、地区からは 30 人ほどの参加だがその 10 程の人がネットなどで遠くから集まっている。

「棚田を守る会」は 4、5 年前に前会長の杉山さんから交代して小島さんが会長になった。現在 10 人ほど参加、そのうち棚田の耕作には 6 人いる。この活動で、14 枚ほどの棚田を復活させている。棚田への思いの原点は、親が苦労して維持してきた棚田が広がる「原風景」であり、さらにこの地区が「郡上一揆」の指導者である「前谷村定次郎」の出身地でもあり、1,500 年～1,700 年ごろ、歩荷で土を運んで作り上げた棚田を守るという思いが強い。

そのことは、毎年春と秋に地区の子ども会が参加して、田植えや稲刈りなどの活動しながら、地区の歴史なども伝えている。——今回、見学した棚田が、映画「郡上一揆」の田植えのシーンの撮影に使われた——。

小島さんは、起業的な関心が強くあり、彼自身は「龍の瞳」というブランド米を栽培、1 俵 5 万円ほどになるという（他の生産者は「秋田こまち」を生産。現状農協の買い取りは 1 万 3 千円ほど。しかも反収は 5 俵ぐらいにしかならないという）。しかし、栽培にかかる経費をすべて計算すると 1 俵 10 万円ないと維持できないという。

したがって、米の生産を生業とするには無理があり、そうであれば、棚田を守るための方策としては、中井氏の研究報告にもあるように①棚田オーナー制度なども含め観光地化、共同化する。前谷棚田米などのブランド化も検討する。（小島さんは関市板取の「モネの池」の成功に関心があり）②ひるがのの農業法人（ひるがのラファネス）の成功事例や、荘川でのそば作り等々。そのような成功事例を踏まえた六次化の「ビジネスモデル」を検討する。そのためには、「地域おこし協力隊」の力も必要になる。

ただし、これらの内容はまだ小島さんの思いが強くあって、具体的な「棚田を守る会」全体での議論にはなっていないようだ。

3. 今後の課題、岐阜地域懇談会としての関わりなど

今回の見学は、とにかく棚田の現状を知りたい、棚田に関わっている人の思いを知りたい、ということで世話人会だけの参加になった。持続してどう関わるかは、まだまだ未知数の部分がおおく、石徹白（いとしろ）の活動なども連動しながら「前谷棚田を守る会」の活動に関心持つことが中心となる。具体的な関わり方は、それからの課題となるだろう。

（くまざき たつひろ）

降りきる雨の中、熱い想いを語り合う 全国おたがいさま交流集会 in 飛騨高山 開催



6月29日～30日、全国おたがいさま交流集会が大雨の飛騨高山で開催されました。沖縄県、香川県、徳島県、山口県、島根県、兵庫県、石川県、千葉県、栃木県、岐阜県の22の「おたがいさま」と関連団体が高山に集まり、交流を深めました。

「おたがいさま」というのは、生協を母体にした、地域でさまざまな困りごとをたすけあうための組織です。全国の生協で取り組まれている「たすけあいの会」と似ていますが、「たすけあいの会」から「おたがいさま」へ移行した例も増えてきました。「おたがいさま」は、自主的で、困っている方に寄り添う運営方法をとっています。決まりにしばられず、利用者と応援者がよりよい関係づくりに努め、応援方法を探り、実施しています。地域、行政、諸団体と共に活動し、地域に根ざしていく事例がたくさん交流されました。財源づくりのためのバザーや、日常の応援に役立つさまざまな学習会等、どこの「おたがいさま」も、応援活動以外にも熱心な取り組みをしておられました。

初日には、地元飛騨市の都竹淳也（つづくじゅんや）氏の『あんきに住み続けられるふるさとづくり』と題した記念講演がありました。「あんきの部分を重視している。行政のいちばんやらないといけないことは、ひとりではできないことをやること。教育や道路をつくること等のインフラ整備。みんながやってほしいことは何かを常に考えている。現場を見ながら対策をとるのが自治体にとって大事。大事なのはみんなの問題。」という信念を持った施策をとっておられます。「市民の中に、福祉にお金をつかみすぎると言う方がおられる。『それはあなたのためにやっている』と私は言っている。障害者、障害児がいなくても、明日、障害がわかるかもしれない。あなた自身が不自由になるかもしれない。そのときに万全のケアができれば安心。だから常に自分のこととして考えたい。」という都竹氏の首長としての熱い想いは、会場の参加者の共感と感動を呼びました。過疎化、高齢化のすすむ飛騨市の様々な取り組みに学ぶことができました。 文責：伊藤小友美

たなばたの笹飾りに祈いをこめて アジアンカフェ 開催

愛知県で共に暮らす方々のデータ（2017年6月）

ブラジル52,919人、中国46,861人、フィリピン34,514人

6月30日、生協生活文化会館でアジアの平和、食と文化フェア実行委員会の主催によるアジアンカフェが開催されました。たなばたのお話で始まり、学習、交流ののち、参加者みんなで笹飾りに願いを書いた短冊を結びました。今回は、フィリピンでの協同組合づくりの支援に取り組むNPO「アイキャン」からも参加があり、フィリピンのクイズや、活動の報告もあり、フィリピンへの関心が広がりました。笹飾りは、コープもとやまの店頭に置きました。重さで枝がしなるほど、短冊が増えました。寄せられた願いはさまざまですが、世界の平和を祈るものが多くありました。

分散会では、日本に滞在しておられる外国の方から、くらしの中で思っておられることを出していただき、交流しました。そういう方々を支援している「外国人ヘルプライン」の方からも、事例を紹介していただきました。アジアンカフェは今回4回目の開催です。

生協生活文化会館の地元、千種区社会福祉協議会にもご案内したところ、職員の方が参加されました。

千種区の外国人住民数（6308人）は名古屋市内で3番目に多く、伸び率は最も高く（840人増）、ベトナムとネパール人の増加（449人）が顕著だそうです。

次回は、アジアのお茶をテーマに、文字通りのカフェを開催する予定です。平和で、くらしが安定していないと、お茶を楽しむことはできません。アジア各国のお国自慢のお茶について学び、味わいながら、語り合います。ぜひご参加ください。10月27日（土）14時～、生協生活文化会館で開催します。 文責：伊藤小友美



情報 クリップ



メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 判型 定価 頁数
<p>▶組合員から広がる 地域でのつながり</p> <hr/> <p>NAVI</p> <p>2018. 7 No. 796</p> <p>日本生活協同組合連合会</p>	<p>特集 組合員から広がる地域でのつながり</p> <p><コープのある風景> 富山県生協 <今日も笑顔のコープさん 生協の仲間のお仕事拝見> ふくいレンボーフาร์ม株式会社 山本翔太さん <想いをかたちにコープ商品> CO・OPミックスキャロット <生協大好きママ コプ山さんの 教えて! CO・OP商品> CO・OPフィッシュソーセージ <ZOOM IN 生協の店舗づくり> 青森県民生協 アカシア館 <私の本ナビ> 鳥取県生協 <うちの生協にはこんな人がいます> コープふくしま <日本全国 宅配現場におじゃまします!> おかやまコープ津高センター <いつでもどこでも 地域とくらしを支えます> 生協くまもと <明日のくらし ささえあうCO・OP共済> コープしが <この人に聴きたい> 障害者クロスカントリースキー選手 新田佳浩さん <ほっとnavi> 一般社団法人 フードバンクかながわ 日本生協連</p>	<p>2018 年 6 月 A4 判 36 頁 360 円</p>
<p>▶フードバンク</p> <hr/> <p>生活協同組合研究</p> <p>2018. 7 vol. 510</p> <p>公益財団法人 生協総合研究所</p>	<p>■巻頭言 食品ロス統計 中嶋康博</p> <p>▶特集 フードバンク</p> <p>日本におけるフードバンクの取り組みと課題 日詰一幸</p> <p>フードバンクの経緯と実情 (インタビュー) 大原悦子</p> <p>世界のフードバンクと発展の課題——機能的複合性と貧困対策—— 小林富雄 松本 亨</p> <p>フードバンクの有する社会的価値</p> <p>コラム 1 コープ東北 コープフードバンク (インタビュー) 中村礼子</p> <p>コラム 2 生協ひろしまのフードバンクの取り組み (インタビュー) 後藤陽一・重田 隆</p> <p>コラム 3 海外生協の食品ロス対策とフードバンク 佐藤孝一</p> <p>■研究と調査 「協同組合保険論」の開講をめぐって 江澤雅彦</p> <p>■時々再録 市役所で進むA I 化 白水忠隆</p> <p>■本誌特集を読んで (2018・5) 松野尾裕・田澤穂高</p> <p>■新刊紹介 佐藤一子・千葉悦子・宮城道子編著 『〈食といのち〉をひらく女性たち:戦後史・現代、そして世界』 三崎敬子</p>	<p>2018 年 7 月 B5判 72 頁</p>

メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 判型 定価 税別
<p>月刊 J A</p> <p>2018. 7 vol. 761</p> <p>全国農業協同組合中央会</p>	<p>スゴイ農業、スゴイ J A J A 自己改革の現場から 地域でもり立てる丹波大納言小豆 ー J A 丹波ひかみ (兵庫県) の丹波大納言小豆の産地振興の取り組み J A 全中 広報部</p> <p>J A ・農政トピック 協同組合の連携について考える 日本協同組合連携機構 (J C A) 協同組合連携部</p> <p>きずな春秋 ー 協同のこころー 童門冬二</p> <p>私のオピニオン 三山秀昭</p> <p>地域を元気にする人たち 山岡享一郎</p> <p>展望 J A の進むべき道 J A 自己改革と経営基盤強化について 山田秀顕 (J A 全中常務理事)</p> <p>海外だより [D . C . 通信] 連載 86 ー 触即発!! アメリカ・中国の貿易戦争 ー アメリカの農家が懸念の声を上げる理由 吉澤龍一郎</p> <p>ラグビーワールドカップ 2019 に注目! RWC をきっかけに地域のレガシーを 松瀬 学</p> <p>第 31 回 広報活動優良 J A 紹介 総合の部 準大賞 / J A くるめ (福岡県)</p>	<p>2018 年 7 月 A 4 判 48 頁 年間予約 5,109 円 (消費税込)</p>
<p>▶ 持続可能な社会の 実現を目指す 組織間連携と協同</p> <p>生協運営資料</p> <p>2018. 7 No. 302</p> <p>日本生活協同組合連合会</p>	<p>巻頭インタビュー ● わが生協、かくありたい! 組合員、職員一人ひとりに向き合い、必要とされる 存在の一つとして地域社会を支えていく こうち生協 ● 代表理事 理事長 西岡雅行氏</p> <p>特集 持続可能な社会の実現を目指す組織間連携と協同</p> <p>1 地元の牛乳を将来にわたって供給するために 持続可能な地域づくりでも生協が役割を發揮 鳥取県生協 ● 代表理事 理事長 浜江隆二氏 (株) みんなの牧場 ● 代表取締役会長 鎌谷一也氏</p> <p>2 班を中心にしたボトムアップの組織と運動を通して仕事づくりと地域づくり を続けた鶴岡の歴史に学ぶ 生協共立社 ● 常任顧問・参与 松本政裕氏</p> <p>3 障がい者が生きがいを持って働ける店舗に かけがえのない価値と可能性を見出す 生協コープかごしま ● 店舗事業本部 本部長 堀切宣正氏 (福) 麦の芽福祉会 ● 常務理事 川瀬加代子氏</p> <p>4 「食卓に笑顔を」目指した食育で地域とつながり さまざまな人の居場所である子ども食堂を主催 いばらきコープ ● 前理事 市原るり子氏 / 前理事 吉澤悦子氏 / 総合企画室 参加とネットワーク担当課長 棚谷靖之氏</p> <p>● これからの店舗事業のあり方を考える 第 14 回 地域から頼りにされる店舗事業を支えるのは 経営再建以来積み上げてきた MD と運営力 コープさつぽろ ● 執行役員 店舗本部長 村上伸吾氏</p> <p>● 全国生協の宅配事業・宅配センター運営を学ぶ 第 26 回 便利なカタログ本誌と、ファンを生むサブカタログの 併用でさらなるお役立ちを目指すコープきんき コープきんき事業連合 ● 食品事業部 食品企画グループマネジャー 蒲生富美恵氏 松村美和氏</p> <p>特別企画 1 福井県民生協が 37 年ぶりの大雪から学んだこと 2018 年 2 月の雪害対応の経過と今後の課題 福井県民生協 ● 常務理事 檜原弘樹氏 / 組織 NW 支援部部長 織田 良氏 / 管理部 次長 近藤明斉氏 / CSR 推進室 専任課長 長谷川雅雄氏</p> <p>特別企画 2 地域愛着スーパーマーケットの現状とこれから 協業をベースにしたシジシー日本の取り組み (株) シジシー日本 ● 専務取締役 開発本部 本部長兼 NB 事業部管掌 藤井淑生氏</p>	<p>2018 年 7 月 B 5 判 108 頁 870 円 (送料別)</p>

メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 判型 定価 頁数
<p>▶ 現場の医療をめぐる 臨床倫理</p> <hr/> <p>文化連情報</p> <p>2018. 7 No. 484</p> <p>日本文化厚生農業協同組合連合会</p>	<p>農協組合長インタビュー (47) 正准組合員の区別なく参加できる総会を開催 山口政雄 多彩に「安心の地域づくり」支店協同活動 福島・三重・山口からモデル農協が中間報告 古谷桃子 院長リレーインタビュー (303) ビジョン明確に機能を抜本改革 働きやすく魅力ある病院づくりへ 鈴木正義</p> <p>二木教授の医療時評 (161) 本年度診療報酬改定でのロボット支援手術の保険適用拡大の 政策的・歴史的評価——「採算割れ」点数は新技術の普及を阻害しない 二木 立</p> <p>文化連創立 70 周年 (3) 下郷診療所の思い出 伊澤 敏 多様な福祉レジャーと海外人材 (4) 技能実習制度 安里和晃 韓国農業の実相——日本との比較を通じて (23) 現場から見た小規模韓牛農家の実態と米韓 F T A の影響 品川 優 臨床倫理メデイエーション (25) 現場の医療をめぐる臨床倫理 (5) ——生命危機下の患者の選好 (Autonomy) 中西淑美 全国統一献立 長野 北信の「たけのこ汁」、南信の「五平餅」 西澤 恵 佐久病院祭から学んだ農業協同組合の強み 松浦峻太 リンゴの剪定技を活用したバイオマス発電——青森県平川市の事例 大平佳男 卸売市場について——法「改正」を前にして考える 長谷川一彦 野の風 ● 「ごっつお」飛騨の酒 北村智恵子 デンマーク & 世界の地域居住 (110) 協議体づくりを市がリード (福岡県福津市) : 1 松岡洋子 熱帯の自然誌 (28) ラミン (長大家屋) 安間繁樹 イギリスの社会的企業 AgeUK Lewisham and Southwark Stones End day Centre (3) デイセンターの運営 小磯 明 フランス赤十字社アンリ・デュナン病院老年科センター (3) 日本への示唆 小磯 明</p> <p>◆第9回厚生連医療メデイエーター養成研修会開催のお知らせ ◆平成 30 年度厚生連院内感染予防対策研修会開催のお知らせ (基礎・アップトゥデート・栄養科) □自著を語る 現代社会と協同組合に関する 12 章／北出俊昭 □書籍紹介 イギリス労使関係法改革の軌跡と展望 ▶線路は続く (124) 九州東海岸を縦断 日豊本線／西出健史</p>	<p>2018 年 7 月 B5 判 88 頁 文化連情報 編集部 03-3370-2529 *注</p>

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(♣)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお気軽にお問い合わせください。

2018年夏

戦争と平和「明治150年」を考えるつどい

主催：「戦争と平和150年展」実行委員会

今年は明治になってから150年。日本の華やかな「近代化」「栄光の明治」をふりかえるだけでよいのでしょうか。この光の裏面には、多くの戦争による悲しい物語がありました。この反省の上に平和憲法が制定され、戦後の平和が続いてきました。しかし、いまこの憲法を変える動きが急展開しています。いまこそ平和と戦争が交錯した150年を見つめ直し、明日にむけていっしょに考え語り合ひましょう。

日時：8月9日(木)～12日(日) 9:00～17:00(最終日は15時まで)

会場：岐阜市民会館(岐阜市美江寺町2-6)2階 集会室全室

参加費:無料

<p>＜オープニング企画＞ 8月9日(木) 13:00～15:00 「戦後日本の光と影～ベトナム戦争から考える」 中村悟郎氏(フォトジャーナリスト・元岐阜大教授) 1940年 長野県生まれ 1976年からベトナムでの枯葉剤による被害を取材 1999～2004年岐阜大学教授(メディア論・環境文化論) 1996年 日本ジャーナリスト会議特別賞 2003年 ベトナム政府より文化功労章授与</p>	<p>＜証言インタビュー＞ 8月10日(金) 13:00～15:00 「満蒙開拓団の悲劇」当事者の女性が語る ＜講演と意見交流＞ 8月11日(土) 13:00～15:00 金 成民氏 & 趙 継敏氏 ＜シンポジウム＞ 8月12日(日) 13:00～15:00 「明治150年」から何を学ぶか</p>
<p>＜各会場の展示・催し等＞ A：中村悟郎写真展「戦争の世紀とベトナム、枯葉剤の悲劇」 B：大日本帝国憲法から日本国憲法へ、そして今。</p>	<p>C：広島・長崎・福島はなんだったのか～原爆と原発 D：沖縄の150年～今に続く「琉球処分」。治安維持法～公布から廃止まで。 その他</p>

主催：「戦争と平和150年展」実行委員会

共同代表：魚次龍雄、木戸季市、近藤真、吉田千秋

連絡先：090-7917-9602(吉田)、090-9661-5097(今井)

167号のチラシで紹介している報告・企画予定

- 1) 「くらしを語りあう会」ニュース No.36
- 2) 「市民・組合員が協働を学びあう講座企画」事前のお知らせ
- 3) 第15回東海交流フォーラム準備のすすめ方【ご案内】
- 4) コープあいちの企画紹介
フィリピンでの協同組合づくりの支援から～NPOアイキャンの活動～、体験者のお話と 災害時食クッキング

地域と協同の研究センター 8月の活動予定		
8月2日(木)	組合員理事ゼミナル世話人会	8月27日(月) 尾張地域懇談会世話人会
8月3日(金)	市民講座検討会	8月28日(火) 研究フォーラム食と農世話人会
8月8日(水)	研究フォーラム環境世話人会	8月29日(水) くらしを語りあう会
8月23日(木)	第3回協同の未来塾	8月30日(木) NEWS編集委員会
8月24日(金)	第73回生協の(未来の)あり方研究会	8月31日(金) 第3回常任理事会

地域と協同の研究センターNEWS167号

発行日2018年7月25日定価200円(税・送料込み)
年会費には購読料が含まれています

発行 特定非営利活動法人 地域と協同の研究センター 代表理事 西川 幸城

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39 TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>